

オツベルと象

作 宮澤賢治

この作品は

ある一人の百姓が
いた。ある日、そ

の百姓のもこへ白い象がや、てき
た。働き物の象に、百姓は、いろ
んなことをおしつけていた。しか
し、とうとうがまんできなくな
た象は、仲間に手紙を書くことに
です。どきどきしたい人におすす
めです。

百姓のオツベルは、いつものよ
うに仕事をしています。オツベ
ルはいつも、大きなパイプをくわ
え、えりそうにしています。

いつもものよりのんのんしてい
たオツベルのもこへ、とつせん白
い象がや、てきた。象は、せ、せ
と働いて、オツベルはいろんなこ
とをたのんでいた。

しかし、とうとうがまんできな
くなつた。すると、男の子が現れ
て、仲間に手紙を書いた。手紙を
読んで象たちが、白象を助けにや

てきた。グララがア、グララがア
とすじい音をたててや、てきた。オ
ツベルも、白象をにかさないように
いろんなことをする。

白象は、象たちに助けられ、みん
まにやさしくむかえられた。

登場人物

オツベル

いつも大きなパイプを
くわえている。とても
大きなオムレツや、ピフテキを食べて
いる。いつものんのんしてえりそうに
している。

白い象

とつせんオツベルのも
とへや、てくる。体が
全身真っ白。とても力持ちで働きもの
の白い象。

心に残った場面

この作の中で心に
残った場面は、仲
間の象たちが助けにくる所です。グララ
がア、グララがアととてもはく力がある
からです。象たちが、い、せいに走、て
きてどきどきします。だからこの場面
が心に残、ています。みなさんも読ん
で見て下さい。

作者の思い

この作品で作者
の宮澤賢治は、
自分ばかり楽をしてはいけな
いということを伝えたか、たんじ
なにかと思いません。あと動物
を道具のようにして大切にしな
か、たからそのばちがあた、た
と思いません。動物を大切にしな
ければいけないんだと思ひます。

感想

ぼくは、オツベルが
白い象を働せて楽を
してりたからばちが当た、たん
だと思ひます。もし本当の話だ
たらぼくは、許せなれと思ひ
ます。自分が楽をして、最後に
は、もどつてくるんです。だか
ら、自分が楽をたりしてはいけ
ないんです。

でも、なぜ白い象なのか分
かりません。今、それを考えて
います。
人は働かずに楽をしては生きて
行けません。一生懸命働いてこ
そ楽が出来るのだと思ひます。
この本をさちんと読んでみたく
なりまいた。